

Glocal Tenri



5

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.5 May 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
御飯は食べてるか
／高見宇造..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (29)
太平洋戦争と北米伝道⑦
ハワイでの戦後復興
／尾上貴行..... 2
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (34)
「おさしづ」第4巻における「本席・家族」と「道」
／澤井治郎..... 3
- ・ 日本語教育と海外伝道 (10)
国内での日本語教育と海外での日本語教育⑤
／大内泰夫..... 4
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (8)
表と裏が反転しあう弁証法的世界
／金子 昭..... 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (45)
文化遺産を今に活かす⑫
保護が急がれる峯塚古墳
／桑原久男..... 6
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (26)
ベルギー領コンゴの独立③
／森 洋明..... 7
- ・ 現代宗教と女性 (24)
「優生保護法」改定阻止運動①
／金子珠理..... 8
- ・ ニューヨーク通信 (新連載)
天理文化協会の誕生
／福井陽一..... 9
- ・ 天理参考館から (17)
即位式にまつわる資料から
「文官礼服用模型」
／幡鎌真理..... 10
- ・ おやさと研究所ニュース 11
新連載執筆のねらいと執筆者紹介／新刊案内／ジェンダー研究会報告「金光教 LGBT 会の取り組み」(金子珠理)／「出前教学講座」申し込み受付／2019 年度公開教学講座の案内

巻頭言

御飯は食べてるか

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

4月1日、筆者の奉職する天理大学で2019年度入学式が挙行され、新入生811名が第一歩を踏み出した。永尾教昭学長は大学の「宗教性」「国際性」「貢献性」を説き、社会の発展に寄与する人材になって欲しいと訓示をされた。大学によっては「令和元年度入学生」と呼ぶそうで、なおさら目出度いことである。親御さんにとってもその喜びはいかばかりか、私も心からお祝いを申し上げたい。とは言え、親元を離れて新生活を始める学生さんも多いから心配もされるだろう。そんな時はぜひ、親御さんご自身が大学に足を運んでいただきたい。

昔の話で恐縮だが、私が京都で学生生活を始めた昭和52年は、さだまさしの「^{かかし}案山子」が流行した年である。覚えておられるだろうか。

「元氣でいるか 街には慣れたか 友達出来たか 寂しくないか お金はあるか 今度いつ帰る ……手紙が無理なら電話でもいい 『金頼む』の一言でもいい お前の笑顔を待ちわびる おふくろに聴かせてやってくれ。」

下宿で一人、「案山子」を聞かされたとき、親の有り難さに涙したものである。両親は電話をかけてくると必ず、先ず「元氣でいるか」、そして「御飯は食べてるか」と聞いてくれた。その時は気付かなかったが、不思議なもので息子が東京で学生生活を始めたときも、先ず口をついて出る言葉は「御飯は食べてるか」であった。親も私も一緒だと思わず苦笑いをしたものである。親とはそういうものなのだろう。それは、我が子がひもじい思いをしてはいないかというまったく親ならではの心である。

ところで私は、『稿本天理教教祖伝』を拝読するなかで、どのように受け止めれば良いのか思案する場面や記述がいくつもある。例えば第九章「御苦勞」である。教祖は、明治7年12月から明治19年2月の満12年間にわたり約17、18回、警

察や監獄に御苦勞下されたが、第九章の270頁には次のようにある。これは「明治17年の御苦勞」と呼ばれ、教祖は87歳であられた。

「教祖は、拘引に来た巡査に向い、『私、何ぞ悪い事したのでありますか。』と、仰せられた。巡査は、お前は何も知らぬが、側について居る者が悪いから、お前も連れて行くのである。と言った。教祖は、『左様ですか。それでは御飯をたべて参ります。ひさやこのお方にも御飯をお上げ。』と、言い付けなされ、御飯を召し上り着物を着替へ、にこにこして巡査に伴われて出掛けられた。」とある。この後、教祖は奈良監獄署に12日間も御苦勞下されることになるが、教祖は自身を拘引に来た警官に対して、お側に居られた方に、「このお方にも御飯をお上げ」と仰せられている。たとえその時刻が昼時であったとはいえ、どうしてこのようなお言葉を発せられたのか、ということである。仮に私自らに置き換えてみても、とても言えることではない。それは恐らく誰でも同じことであろう。ではどうしてと考えると、教祖はこの警官に対してもまったく実の親が我が子に接するようなお心であったということである。「お前も忙しそうにしているがお腹は空いてないか、御飯は食べてるか」とご心配を下され、そのように仰せになったと考えると合点がいった。

この場面はともすれば深く考えることなく読み進んでしまうが、実は教祖のお心を我々も実感、経験させていただける大切な場面ではないかと思っている。『天理教教典』第一章「おやさま」(12頁)には、「月日のやしろたる教祖こそ、まことに一れつ人間の親である、との信頼と喜悅の心を、たかめるように導かれた。」とあるが、真に有り難いおひながたとして私は受け止めている。

皆さんはどのように思われるだろうか。